

弥勒下生経類と
『大いなる帰滅の物語』の関係

岡 野 潔

印度学宗教学会 論集 第34号別刷

平成19年

2007

弥勒下生経類と 『大いなる帰滅の物語』の関係

岡 野 潔

正量部の宇宙論文献、『大いなる帰滅の物語』(Mahāsaṃvartanīkathā 略号: MSK) 第4章2節と文献X(『有為無為決択』第8章中に引用された書名不明の正量部作品)の相当箇所、ならびに立世阿毘曇論(大正No.1644 略号: 立世論)・Lokapaññatti (ed. E. DENIS)によれば、現在の中間劫は第9劫であり、この第9劫は飢餓を主とするカタストロフにより人類の大半が滅んで終結する。しかし次の劫(第10劫)に入ると、人類にとって幸せな時代が幕を開け、平均寿命の増大期に入る。

その第10劫の開始時の記述を、文献Xは次のように(§170以下)説く。

[§170] その後、第10劫が始まる。[§171] その時、人々は友人の如く互いに見て、歓喜を有するだろう。それらの人々を支えるものとして第10劫が現われるだろう。[§172] その時、もろもろの遊星も正しい道を歩むだろう。諸季節も、悪の状態から離れたものとして、現われるだろう。[§173] このように、内のあり方が[外のあり方と]自性において同じになった時、[正しい]法の支配が現われるだろう。また安楽も、何一つ欠けることのない状態へ至るだろう。[§174] その後、人から人が生まれるだろう。その者たちから別の人々が、またその者たちからまた別の人々が[生まれるだろう]。その者たちからまた別の人々が[生まれる時]、段階的に、寿命が二万歳の人々が現われるだろう。これが『小なる[寿命]増進』である。その後段階的に、[寿命が]四万歳の人々が現われるだろう。これが『中なる[寿命]増進』である。さらに段階的に、寿命が八万歳の人々が現われる。これが『大なる[寿命]増進』である。

文献Xはこのように人寿八万歳の至福に達することを説いて、それから——この箇所が本論文の中心的課題となるが——その未来の劫の理想世界の有様を次のように説く。

[§175] ここで、[寿命]増進の頂点にいたった人間たちの家庭は、女神ラクシュ

ミーの如く、じつに繁栄し、娘は五百歳で嫁ぐだろう。〔§ 176〕それらの人間たちには、寿命〔の長さ〕と相応して現われる、美貌（*rūpa）その他〔の性質〕が、卓越したかたちで現われるだろう。〔§ 177〕その時、鶏鳴の〔相互に聞こえる〕場（領域）〔となった〕、人の住み処たる、大地すべては、村々や都市などによって充ち満ちたすがたで現われるだろう。〔§ 178〕大地は不浄を下へと処理し（*adhaḥ-kṛtvā）、清浄さをもつ〔土〕が、現われるだろう。〔§ 179〕人々は、〔あらゆる〕『楽』を伴う完全な幸福によって満足して、『苦』を思い出さないだろう。〔§ 180〕寒さ暑さなど・飢え・老い・享受の欲求（*paribhoga-vāñchā）のみが〔患いを〕作り、『苦』があってもその場合は『苦』の便宜的名称があるのみである。〔§ 181〕その時、人々は『大なる〔寿命〕増進』（人寿八万歳）に至って、幾千無量の年の間、繁栄するだろう。

このように § 181まで、第10劫の理想の世の有様が語られた後に、次の文によって、第10劫前半の人寿上昇の時代の叙述を閉じている：「〔§ 182〕再び、その後、『大なる〔寿命〕増進』から人々の寿命は落ちて衰えるだろう」。

上記の訳で示した文献Xの §§ 170–182は、『大いなる帰滅の物語』（MSK）の4. 4. 1~4. 4. 13詩節にあたる。文献Xのこれらの文とMSKの詩節は順序も内容も一致している。文献Xの § 179の内容が、MSKでは2詩節（4. 4. 9–10）にまたがっている以外は、文献XとMSKの内容は完全に一致する。そのためMSKの方の訳は省略するが、MSKのこの箇所訳は岡野（2008）を参照していただきたい¹。私はMSKは文献Xに基づいて作られたと推測するので、文献Xのほうを優先させて、その和訳を以上に挙げた次第である。

さてその箇所の、 §§ 175–181の一連の文を見ると、未来第10劫の人寿八万歳の理想世界の表現としての各文は互いに横並びの関係（並列関係）にある。テキストの中でこれらの文はひとまとまり、一つのブロック（固まり）を形成している。文献Xのこのブロック §§ 175–181は、文の連続性・並列性から判断して、同一の源泉資料に基づいている可能性が高いと思われる。ではこの「未来劫人寿八万の世」描写ブロックの源泉資料は何であろうか。それは恐らく文献Xの作者が所属していた正量部の系統が伝持していた聖典か準聖典であろう。文献Xの冒頭の文（§ 1）は、この作品が正量部の聖典に基づくものであることを告げているからである。正量部聖典はほとんど現存していないが、しかし聖典類であれば、他の小乗部派も、同一ではないものの類似した並行的な伝承

をもっていた可能性があり、現存する資料の中を探せば、酷似する別の伝承が見つかるとあるので、現存する仏教文献に類似文を探してみよう。

文献X (§§ 175-181) と MSK のこのブロックの内容は次の七つのモチーフから成る。

- (a) 娘は五百歳で嫁ぐ (§ 175 = MSK 4. 4. 5).
- (b) 福德による美貌やその他(身体的能力)の卓越 (§ 176 = MSK 4. 4. 6).
- (c) 町や村々が鶏鳴(鶏飛)の距離まで接近する (§ 177 = MSK 4. 4. 7).
- (d) 大地による糞便の処理 (§ 178 = MSK 4. 4. 8).
- (e) 苦がなくなり、安楽となる (§ 179 = MSK 4. 4. 9-10).
- (f) わずかな数の患(病)のみがある (§ 180 = MSK 4. 4. 11).
- (g) 人寿八万歳の時代 (§ 181 = MSK 4. 4. 12).

この七つのモチーフをもつ類似文を現存する聖典に探して見ると、(a)・(c)・(f)・(g)のモチーフは、阿含・ニカーヤの「転輪王経類」——すなわちパーリ DN 26 転輪王師子吼経 *Cakkavattisihanādasutta* や長阿含卷6 第6 経転輪聖王修行経や中阿含卷15 第70 経転輪聖王経——の諸經典の、転輪王の人寿八万歳の世の閻浮堤の記述において、まとまって出てくる²。この点を、次に少し詳しく確認しよう。

まず転輪王経類の中で最も付加増広が多い、長阿含転輪聖王修行経(T1 41c)を見ると、人寿八万歳の世の閻浮堤の表現として、次の11のモチーフが並べられる：(i)八万歳、(ii)五百歳の嫁、(iii)九種の病(患)、(iv)大地の平整さ、(v)荊棘なし、(vi)蚊虻・毒蛇・毒虫なし、(vii)自然石が瑠璃、(viii)人民充滿、(ix)豊作富樂繁榮、(x)八万大城、(xi)町や村の相互の近さが鶏鳴の距離。このうち(i)は上記の(g)に、(ii)は(a)に、(iii)は(f)に、(xi)は(c)に明確に対応している。また(vi)の〈豊作富樂繁榮〉というモチーフは、(e)のモチーフに漠然と対応するようであるが、全く同じではない。

次にパーリの転輪王師子吼経を見ると、もっと簡素な形であり、八万歳の世の閻浮堤の表現として(i)八万歳、(ii)五百歳の嫁、(iii)三種の病(患)、(iv)鶏飛の距離、(v)人民充滿、(vi)豊作富樂繁榮、という六つのモチーフが並んでいる。有部の中阿含(70)転輪王経(T1 524b)も、パーリ文とは順番こそ違え、ほぼ同じ内容の六つのモチーフである。中阿含(66)説本経(T1 509c)と古来世事経も(T1 830a)も中阿含転輪王経と同じである。長阿含転輪聖王修行経のよう

にひどく付加増広がなされる以前は、六つのモチーフが上座部系の阿含・ニカーヤの伝承における古形であったことがわかる。この六つのモチーフは、長阿含・阿含・ニカーヤ聖典に出てくる(i)～(iv)の四つのモチーフが明確に文献X・MSKのモチーフと対応しており、(i)は(g)に、(ii)は(a)に、(iii)は(f)に、(iv)は(c)に対応する。この阿含・ニカーヤ聖典に出てくる(i)～(iv)の四つのモチーフは、八万歳の世の表現として独立性が「強いモチーフ」である。それに対して、(v)〈人民充満〉と(vi)〈豊作富楽繁栄〉の二つのモチーフは八万寿の世界以外の描写でも一般に使用が可能な性質のもので、独立性が「弱いモチーフ」である。

文献XとMSKの伝承に出てくる上述の(a)～(g)の七つのモチーフは、阿含・ニカーヤ聖典が伝承する四つの「強いモチーフ」に、新しい三つを足したものであることがわかる。ただし、阿含の(iv)〈豊作富楽繁栄〉のモチーフが(e)〈苦がなくなり、安楽となる〉のモチーフに漠然と(弱く)対応しているとみなせば、文献X・MSKにおける新しいモチーフは三つではなく、二つであることになる。この二つの独自のモチーフ、(b)〈福德による美貌やその他(身体的能力)の卓越〉と(d)〈大地による糞便の処理〉は、上記の長阿含・阿含・ニカーヤ聖典に出てくる(i)～(iv)の四つのモチーフの中にも入っていない。またそれは後述するように、立世論や世記経や施設論世間施設にも入っていない。一体文献XとMSKのこの(b)・(d)のモチーフはどこから来たものなのであろうか。

ここで私のことをお話するのは恐縮であるが、私が10年ほど前にMSKと文献Xを校訂・独訳して、各詩節に対して並行文献に関する注を記した時には、(b)・(d)のモチーフの源泉については皆目見当がつかなかった。ところが最近、MSKと文献Xのこの箇所を読み返すうちに、それまで解釈のピントが合わずに曖昧に理解していたMSK 4. 4. 8詩節(文献X § 178)が、実は大地による糞便の処理のことを説いていて、それは弥勒下生成仏経に描かれる人寿八万歳の世の有様の一つとしての、「人が大小便をすると地面が割れて中に吸い込み、吸い込んだ後は元通りふさがる」という内容の文に対応していることに、初めて気づいた。それまでも弥勒経には「転輪王経類」とパラレルの文が多くあることは知っており、一応目を通していたが、MSK 4. 4. 8詩節(文献X § 178)のいわんとなることがよく理解できていなかったため、気づかずに空しく素通りしていたのである。今やMSK 4. 4. 8詩節は次のように訳すことが出来る：「純一なる清浄さに至るため、まるで人間たちのように、大地はすべての不浄

(糞便)を、もろもろの悪(pāpāni)と同じように、下に捨てて(下へ処理して adhaḥ-kṛtvā), 合わさるだろう(sameṣyanti)」。この(d)〈大地による糞便の処理〉のモチーフの把握によって、私はようやく文献XとMSKの文が弥勒経と関係をもつことに気づいたのである。この発見に促されて、私はもう一度弥勒経中の人寿八万歳の理想世界の有様を描いた箇所を調べ直してみた。その結果、以下のことがわかった。

現存する漢訳の弥勒経典は、弥勒六部経と呼ばれるように、六種類のテキストが現存する。そのうちの観弥勒菩薩上生兜率天経(大正No.452)を除く5本(大正No.453~No.457)は経の内容が互いに類似しているの、5本まとめて弥勒下生経類と呼ぶ。

人寿八万歳の未来世界のありさまの描写において、阿含・ニカーヤ聖典の転輪王経類と密接に関係し、それに遡るモチーフがいくつも出てくるのは弥勒下生経類である。その下生経類と関連文献を対象に、上記の文献XとMSKに出てくる七つのモチーフがどの程度合うかを調べ直してみた。すると興味深い結論が得られた。それらの資料の中で特に義浄訳の弥勒下生成仏経(大正No.455)には、偶然とは思われないほど一箇所に集中的に、それらのモチーフが連続して説かれていることが判明した。

私が5種の漢訳の下生経類の中で私が最も文献XとMSKの伝承に近いと感じた義浄訳の弥勒下生成仏経の該当箇所(T14 426b1-6)は次の6行の文である：

- | | |
|-----------------|-----------------|
| (1) 時彼國中人 皆壽八萬歲 | (2) 無有諸疾苦 離惱常安樂 |
| (3) 具相悉端嚴 色力皆圓滿 | (4) 人患有三種 食衰老便利 |
| (5) 女年五百歲 方乃作婚姻 | (6) 諸有欲便利 地裂而容受 |

この義浄訳の下生経には梵文も伝わっており、幸運なことにネパール本Maitreyavyākaraṇaにはその該当箇所(10cd-12)もあるので³、その箇所を次に訳してみる。

- (1)彼らは八万歳の寿命をもつだろう。(2)彼ら有情は健康(無病)で、憂いを離れ、大きな喜びをもつ。(3)美貌をもち、能力に勝れ、偉大な象のような力を与える⁴。(4)欲求・不食(飢え)・老いという三つの患い(病)をもつ。(5)娘は五百歳で結婚する。(梵文には漢訳の(6)の文が欠損している)

この、一箇所連続する六つの文(1)～(6)を、上記の MSK と文献 X 伝承の七つのモチーフと合わせてみると、文(5)はモチーフ(a)〈五百歳で嫁ぐ〉；文(3)はモチーフ(b)〈美貌やその他(身体的能力)の卓越〉；文(6)はモチーフ(d)〈大地による糞便の処理〉；文(2)はモチーフ(e)〈苦がなくなり、安楽となる〉；文(4)はモチーフ(f)〈わずかな数の患(病)のみがある〉；文(1)はモチーフ(g)〈人寿八万歳〉——と、このようにきれいに対応する。順番は異なっているが、内容的にはモチーフ(c)〈鶏鳴(鶏飛)の距離〉が欠けているだけである。鶏鳴(鶏飛)のモチーフは⁵、他の「下生経」には必ずみつかると必須の(転輪王経類に遡る)ものなので、義浄訳の弥勒下生成仏経のこの箇所にも見つからないのは奇妙である。本来はそのモチーフもこの箇所に有ったが、或る時代に理解しがたいモチーフとして(?)勝手に削除された可能性も考えられる。ともあれ七つのモチーフのうち六つがこのように義浄訳では一箇所に固まって連続して出てくるのは偶然ではありえない。上記の「未来劫の人寿八万の世」描写ブロックのソースは、義浄訳の下生経のその一節を生んだ伝承と密接に関係している可能性がある。

上の義浄訳下生経の記事ほど簡潔で一箇所集中的ではないが、興味深いのは、次に紹介するコータン語文献『ザンバスタの書』第22章(韻文；弥勒下生経 Maitreya-vyākaraṇa に相当)の記事である。その章の「人寿八万の弥勒の世」の描写には、古い時代の弥勒下生経にはなかった多種多様なモチーフを見出すことが出来るが、文献 X と MSK の伝承によく合う六つのモチーフが伝えられている点で、重要である。Emmerick の英訳があるが⁶、以下に、その箇所の重訳を示し、上記モチーフに関連する文には番号を付し下線を引く：

『弥勒の時代に、この閻浮堤は今日と比較して三千由旬増大する。この閻浮堤は
 [直径が] 一万由旬となり、人の掌のように平らである。地の高所・低所は消える。
 (1)鶏が一度飛び上がっただけで、隣(1)の村に達するだろう。窪地、砂漠、裂けめ、密林、砂の由旬、オアシスが消える。泥や石や丸い塊は無くなる。植物は棘をもたない。香りのよい草木が孔雀の頸の色のように輝いて生育する。たくさんの川、泉、池、蓮の小池がある。鳥や動物があらゆる種類のやさしい声で鳴く。それらは恐れなく遊ぶ。それらは戦わず、互いに恐れない。たくさんの樹があり、枝に多くの実をつける。それぞれ3クローシャの高さである。葉や実や花はよい香りがする。小池に囲まれた園林がある。多くの蓮、青蓮、白蓮がある。Sumanas, Campaka, Atimukta, Aśoka, Vārṣika [の花] が豊かにある。毎夜少し雨が降り、朝には晴れる。地の表

面は平整である。大地は平滑で、柔軟である。善良で徳あり信心あり悪を離れた人々で世界は満ちる。(2)この時有情の寿命は八万歳である。(3)父母は五百歳の未だ大人になっていない娘を嫁がせる。人々は十不善業道を遠ざけ、(4)美しい容姿である。今日の「丈」でいえば、彼らは四十丈の身長をもつ。一年に一度種を蒔く。それは十倍伸びる。耕す必要なく伸びる。雨は正しい時節に降る。とても美味で淨らかで口当たりのよい食事は人を強壮にする。香ばしい稲は天界のシュハの如く生育する。(5)ごくわずかの患い(病)があるだけである：眠り・熱・飢え・渴き・老い、ならびに排尿・排便・胃の悩みの時の生理的運動。(6)便をする時には大地が割れ開き、用を済ませた後それは再び完全に盛り上がる(塞がる)。死期が近づいた時、人は前もって知る。彼は墓地に行つて横たわり、横たわると「まもなく」死ぬ。』(pp. 305-307)

上記の文を、七つのモチーフと合わせてみると、次のように対応する：文(1)はモチーフ(c)、文(2)はモチーフ(g)、文(3)はモチーフ(a)、文(4)はモチーフ(b)、文(5)はモチーフ(f)、文(6)はモチーフ(d)。(e)〈苦がなくなり、安楽となる〉のモチーフの対応だけが欠けているのは残念であるが、残り六つのモチーフはかなりきれいに対応する。モチーフ(c)〈鶏鳴(鶏飛)の距離〉が離れた位置にあるが、大体のモチーフがあまり離れずにまとまって揃っている。

この2文献に次いで、MSKと文献Xの七つのモチーフ伝承にかなり近いと感じる、鳩摩羅什訳の弥勒下生成仏經(大正No.454)の中の該当箇所(T14 423 c17-424a6)を以下に挙げる：

423c17-20：(1)城邑次比鶏飛相及。(2)人壽八萬四千歳。(3)智慧威徳色力具足。(4)安隱快樂。(5)唯有三病、一者便利、二者飲食、三者衰老。(6)女人年五百歳爾乃行嫁。
[.....](大正蔵で13行分を省略)。

424a5-6：(7)若有便利不淨、地裂受之、受已還合。

この上記の文を、七つのモチーフと合わせてみると、次のように対応する：文(1)はモチーフ(c)、文(2)はモチーフ(g)、文(3)はモチーフ(b)、文(4)はモチーフ(e)、文(5)はモチーフ(f)、文(6)はモチーフ(a)、文(7)はモチーフ(d)。これもきれいな対応関係である。最後の文(7)の〈大地による糞便の処理〉のモチーフのみが位置的にひどく外れていて、都城ケートゥマティーの描写の方に置かれているのが残念であるが、一応はそのモチーフも有るということと、また(1)~(6)が一箇所

に集まって連続している点で、MSKと文献Xの伝承に相当近いという印象を受ける。しかし(d)〈大地による糞便の処理〉のモチーフが、他の六つのモチーフとまだ一緒になっていない点では、上記の2文献には及ばず、文献X・MSKの伝承と少し隔たりがある、といえよう。

次に羅什訳弥勒大成仏經（大正No.456）を見てみよう。この經典は、上記の羅什訳弥勒下生經と密接な関係があり、小乗的な經典であるそれを大乘經典として増広して書き直した經典のようである。そこに上記のモチーフに対応している文を探すと、次の(1)～(9)の文がそれにあたる：

- 429a23-b1：(1)城邑次比，鶏飛相及。(2)皆由今佛種大善根行慈心報，俱生彼國，智慧威德五欲衆具。(3)快樂安隱。亦無寒熱風火等病，無九惱苦。(4)壽命具足八萬四千歲，無有中夭。(5)人身悉長一十六丈。(6)日日常受極妙安樂，遊深禪定，以為樂器。(7)唯有三病，一者飲食，二者便利，三者衰老。(8)女人年五百歲爾乃行嫁。
[.....]（大正藏で20行分を省略）。

b22-23：(9)設有便利，地裂受之，受已還合。生赤蓮華，以蔽穢氣。

最後の(9)の文のみが、羅什訳弥勒下生經と同様に、位置的にひどく外れている。この經でも、大地の大小便処理のモチーフが他のモチーフとまだ一体になっていない。この(1)～(9)の文を上記の七つのモチーフと合わせてみると、文(1)=モチーフ(c)，文(2)=モチーフ(b)，文(3)=モチーフ(e)，文(4)=モチーフ(g)，文(5)=モチーフ(b)，文(6)=モチーフ(e)，文(7)=モチーフ(f)，文(8)=モチーフ(a)，文(9)=モチーフ(d)，となる。ただしモチーフ(b)に対して対応する文が二つ（2と5）あるし、モチーフ(e)に対して対応する文が二つ（3と6）ある。MSK・文献Xの伝承とモチーフが比較的良好に対応しているといえるが、しかし上記の義浄訳と羅什訳の下生經ほどには合致しないことがわかる。この經は伝承としては羅什訳の下生經と同系統であろうが、余計な増広がなされている分だけ、文献X・MSKに見られる伝承からは遠ざかった印象をもたざるをえない。

義浄訳下生經・羅什訳下生經・羅什訳大經以外の、残りの二つの下生經も見ると、たしかに文献XとMSKの七つのモチーフに似たものを部分的に見出すことが出来るものの、先の4文献よりもさらに合わなくなる。まず訳者不明の弥勒来時經（大正No.57）を見てみよう。次の文（T14 434b27-c3）で、モチーフに対応する文には(1)～(4)の番号を付す。

當是時人民少貪婬瞋恚愚癡者。(1)人民衆多聚落家居，鷄鳴展轉相聞。(2)人民皆壽八萬四千歲。(3)女人五百歲乃行嫁。(4)人民無病痛者。(5)盡天下人有三病，一者意欲有所得，二者飢渴，三者年老。人民面目皆桃花色。人民皆敬重。

この(1)～(4)の文を七つのモチーフと合わせてみると、文(1)=モチーフ(c)〈鷄鳴(鷄飛)の距離〉、文(2)=モチーフ(g)〈人壽八萬歲〉、文(3)=モチーフ(a)〈五百歲で嫁ぐ〉、文(5)=モチーフ(f)〈わずかな数の患(病)のみがある〉となる。文(4)はモチーフ(e)〈苦がなくなり、安樂となる〉にあたるとされる。たしかに関連文が一箇所にとまってはいるが、この定型文の発達段階は阿含經の段階を越えていない。(b)・(d)の二つの強いモチーフが欠けている点で転輪王經類と同じであり、MSK・文献Xの伝承とは隔たっている。

次に竺法護訳と伝えられる弥勒下生經(大正No.453)を見てみよう。この經は増一阿含卷44第3經(T2 787c-789c)と文面が同じである。モチーフに対応する文を探すと、その該当箇所(T14 421a28-c13)は上記の下生経類ほどに一箇所に集中しておらず、かなり散在している。次の文がそれにあたる。引用には(1)～(5)の番号を付す：

421a28：舉閻浮地内(1)穀食豐賤，人民熾盛，多諸珍寶。(2)諸村落相近，鷄鳴相接。

[.....] (大正蔵で6行分を省略)。

b7-9：(3)彼時男女之類意欲大小便時，地自然開。事訖之後，地便還合。

[.....] (大正蔵で30行分を省略)。

c11-13：爾時人壽極長(4)無有諸患。(5)皆壽八萬四千歲。(6)女人年五百歲然後出嫁。

この(1)～(5)の文を七つのモチーフと合わせてみると、文(2)=モチーフ(c)、文(3)=モチーフ(d)、文(4)=モチーフ(f)、文(5)=モチーフ(g)、文(6)=モチーフ(a)となる。文(1)はモチーフ(e)と関連があろう。ここでは、六つのモチーフの置かれている場所がかなりばらばらで、一箇所に関連モチーフが集まっていないことから、MSK・文献Xに見られる伝承とは全く系統が違ふことは明らかである。しかし文(3)でモチーフ(d)〈大地による糞便の処理〉が出てきている点で、すでに阿含經(轉輪王經)の発達段階を超えて、他の弥勒下生經と同じ段階に入っているといえるし、またそのモチーフ(d)が都城ケートウマティーの描写ではなく閻浮堤の描写に置かれている点では、義浄訳や『ザンバスタの書』と共通する。

以上で漢訳の下生経5種を検討しおわった。このほか検討すべき弥勒経関連

文献として、古トルコ語（ウイグル語）のマイトレーヤ・サミティ、チベット訳の聖弥勒菩薩発趣経（東北No.198）、パーリ文の聖典外文献アナーガタ・ヴァンサ、トカラ語 A のマイトレーヤ・サミティ劇などがある⁷。それらの文献を検討すると、やはり MSK・文献 X に見られる伝承とは、全然系統が違うことがわかる。比較の詳細は省略する。

次に長阿含世記経・有部の蔵訳世間施設・立世論という、大体同じ頃（阿含・ニカーヤ文献がほぼ形成を終えた時代）に作られた大規模な宇宙論書における、同じ常用文を確認する。それらの文献では人寿八万歳の諸モチーフはどのような段階にあるのか。まず長阿含世記経であるが、その転輪聖王品の該当箇所（T 1 120c-121a）では、先の長阿含転輪聖王修行経の11モチーフがさらに詳細化するかたちで増広されている印象を受けるが、その増広において文献 X・MSK の二つの強いモチーフ(b)・(d)は見出せない。次に有部の蔵訳世間施設を見てみると、中阿含転輪王経（T1 524b）にあるような阿含段階的6モチーフの後に、最後に新たに一つの新しいモチーフが付加されている。加藤清の訳で示すと「寿命八万歳の諸人の諸穀は大にして甚だ大なり。譬えば因陀羅竹（indravenu）果の如く勝れ、最勝にして、唯だ一穂のみによりてさえ四斗斛を生ずるなり」という文がそれである⁸。しかし世間施設でもやはり正量部伝承特有のモチーフの付加は無い。

最後に立世論を見てみよう。この犢子正量部文献において、人寿八万歳のモチーフを述べた箇所（T32 221a7-15）は次の文である。

如是閻浮提劫中間所生衆生(1)壽量長遠，究竟極此八十年。(2)是時女人年五百歳爾乃行嫁。(3)是時諸人唯有七病，謂大小便利寒熱欲心飢老。(4)如是時中一切國土富貴豐樂。(5)無有怨賊及以盜竊。(6)州郡縣邑人民村落更相次比，鷄鳴相聞。(7)耕種雖少收實巨多。(8)是時諸人受功用果少，用宿世善業果多。(9)舍宅車乘衣服財寶資生之具稱意具足。雖復受用終身不壞。(10)是時諸人安坐受樂，無所馳求。

それぞれの文(10まで番号付けした)のモチーフを見てみると、文(1)はモチーフ(g)〈人寿八万歳〉。文(2)はモチーフ(a)〈五百歳で嫁ぐ〉。文(3)はモチーフ(f)〈わずかな数の患い(病)〉。文(4)は上述の転輪師子吼経のモチーフ(vi)〈豊作富楽繁榮〉。文(5)は新出のモチーフ。文(6)はモチーフ(c)〈鷄鳴の距離〉。文(7)は上述の有部の蔵訳世間施設の最後のモチーフ。文(8)は新出のモチーフ。文(9)も新出の

モチーフ。文(10)はモチーフ(e)〈苦がなくなり、安楽となる〉。

この立世論の文を見て気づくのは、阿含・ニカーヤの転輪王経類のモチーフを土台にして、それをさらに増広した段階にある文ではあるが、しかし文献X・MSKの伝承と直接的につながっていないことである（ただしモチーフ(e)の明確さの点で阿含段階の多くのパラレルよりも進んでいる）。文献X・MSKの七つのモチーフのうち、五つまでは見つかるが、二つの強いモチーフ(b)・(d)に対応する文が無いことが決定的な違いである。文献X・MSKの伝承は、立世論から直接出たものではないことが確かめられた。

以上、阿含の転輪王経類→弥勒下生経類→小乗の宇宙論書の順序で、文献を見てきたが、その結果正量部の文献X・MSKの「未来劫の人寿八万の世」描写ブロックの伝承は、阿含経や小乗宇宙論書の中には、弥勒下生類ほどにそれと酷似する資料、直接の源泉と考えられる資料を見出せず、それは同じ犢子正量部系の立世論の記述よりも、弥勒下生経類に近いことが確かめられた。

現存する漢訳弥勒下生経5種の比較を振り返るならば、義浄訳の下生経の記述が、(d)〈大地による糞便の処理〉のモチーフも含めて六つのモチーフが一箇所に固まっている点で、文献X・MSKの伝承に一番近い。たしかにそこには(c)〈鶏鳴(鶏飛)の距離〉のモチーフだけが欠けているが、これは他の下生経すべてでその同じ箇所に置かれていることから、何らかの誤りで欠損した可能性がある。(d)〈大地による糞便の処理〉のモチーフが他のモチーフと一緒に同じ場所に置かれている点では、義浄訳の伝承と『ザンバスタの書』の両文献が目につく。羅什訳下生経の伝承では(d)〈大地による糞便の処理〉のモチーフがひどく外れた位置にある点が注意されるが、残りの六つのモチーフは一箇所に集まっている。文献X・MSKの七つのモチーフが全部きれいに揃っている。

まとめると、(d)のモチーフが都城ケートゥマティーの描写ではなく、閻浮堤の描写に置かれているという点から見れば、義浄訳と『ザンバスタの書』と竺法護訳(?)下生経(大正No.453)は同じ系統に属するが、羅什訳下生経と羅什訳大成仏経はそうではない。しかし常用文の内容そのものから見れば、羅什訳下生経はきわめて文献X・MSKの伝承に近く、竺法護訳(?)下生経はそうではない。総合的に見て、義浄訳と『ザンバスタの書』と羅什訳下生経の三者が文献X・MSKの伝承に最も近い位置にある。それらの下生文献における人寿八万

歳の常用文は、明らかに転輪王経類にあったものよりも後の段階を示している。この転輪王経類と下生文献の中間に位置する文献として、『前後経』があるので⁹、それを次に考察しよう。

義浄訳下生経の韻文の冒頭に、「如前後経説」という言葉が出てくる。それは「世尊が前後経（“sūtra-pūrvāparāntika” = *pūrvāparāntika-sūtra?）において未来仏マイトレーヤという名の未来仏を説かれたが、彼について詳細をお聞きたい」と舍利弗が質問をする箇所である。同様の『前後経』への言及は、羅什の弥勒下生成仏経にもあり、「世尊如前後経中説。彌勒當下作佛」とある（T 14 423c10）。また羅什の弥勒大成仏経にも同様の記述がある。これら三つの下生経は、阿含聖典『前後経』の説くところを聖典的根拠にして、そこで世尊が予言された弥勒仏の出現を説き直したものである。

『前後経』という経は、パーリ經典には対応経はないが、その漢訳として中阿含卷13第66経の説本経（大正No.26）と古来世事経（大正No.44）の2本がある。前者は有部が伝承したヴァージョンであることが確実である。後者の部派は不明であるが、香川孝雄によれば前者と「同本異訳」で¹⁰、やはり有部のものらしい。正量部も同じような經典を伝持していた可能性も無くもない。そこで私は文献X・MSKの七つのモチーフの源泉資料として、次の三つの可能性を想定するべきであると思う。(1)弥勒下生経から取った。(2)正量部の阿含にある転輪王経から取った。(3)正量部の阿含にある『前後経』から取った。この第3の可能性をもう少し探してみよう。

『前後経』にあたる有部伝承本の漢訳として現存する説本経を見ると、たしかに上記の七つのモチーフに関連する箇所（T1 509c9-14）がある。しかし現存資料には次のように四つのモチーフしかない：

世尊告曰。諸比丘。(1)未來久遠當有人民壽八萬歲。人壽八萬歲時此閻浮洲(2)極大富樂。多有人民。(3)村邑相近。如鷄一飛。諸比丘。人壽八萬歲時(4)女年五百乃當出嫁。諸比丘。人壽八萬歲時(5)唯有如是病。謂寒熱大小便欲飲食老。更無餘患。

文(1)=モチーフ(g), (3)=モチーフ(c), (4)=モチーフ(a), (5)=モチーフ(f)である。文(2)はモチーフ(e)と関連があらう。

『前後経』の別の漢訳、古来世事経の該当箇所（T1 830a13-17）は次のとおり：

佛言。(1)當來之世人當長命壽八萬歲。此閻浮提(2)人民熾盛。五穀豐賤。(3)人聚落

居、鶏鳴相聞。(4)女人五百歳乃行嫁耳。(5)都有三病，老病大小便。有所思求。

古来世事経も(1)=モチーフ(g), (3)=モチーフ(c), (4)=モチーフ(a), (5)=モチーフ(f)である。文(2)はモチーフ(e)と関連があろう。つまり説本経と全く同じである。このように説本経と古来世事経という『前後経』の現存するヴァージョンには、阿含経の段階の基本的なモチーフしか出てこない。つまりこの説本経や古来世事経をみる限り、『前後経』類は、転輪王経類とほぼ同じ発達段階にある。『前後経』は位置的には転輪王経類と下生経類の中間に位置するが、常用文の発達段階では転輪王経類と変わらない。

そろそろ結論をまとめよう。阿含・二カーヤの経（転輪王経類や『前後経』）にある常用文のモチーフが、ある時代に大きく飛躍して、弥勒下生経の未来世の描写を作り上げた。私の考えでは、阿含の段階と弥勒下生経の段階とを分かつ決定的な一線は、(d)〈大地による糞便の処理〉のモチーフがあるかないかである。それがあれば弥勒経の段階、なければ阿含経の段階に近いといつてよい。弥勒信仰はもともと小乗仏教の内部で起こったものであり、それゆえに小乗の阿含聖典から出発して、それが無理なく発達した結果として弥勒経が生まれた。阿含・二カーヤ成立期の遅い時期に転輪王経類が出来て、「一世界、一転輪王」という素朴な宇宙論たる中間劫のコスモロジーが確立すると、その転輪王経類には未来の転輪王の統べる理想世界が説かれていたために、後からその聖典の箇所、転輪王と一緒に弥勒如来が出現するという弥勒信仰が付加されて、未来の転輪王の理想世界が、未来の弥勒の理想世界に代えられた。その結果、弥勒信仰の付加を受けた転輪王経類から、ある部派系統においては、本格的に未来の弥勒の世を予言する『前後経』（説本経・古来世事経）が生まれた。ここまでが阿含の段階である。そしてさらに『前後経』を聖典的根拠として弥勒信仰が進んだ結果、弥勒下生経（大乘・小乗）が生まれた。

文献XとMSKの七つのモチーフの成立は、阿含経の段階から弥勒下生経の段階までの発展の途中に位置するのではないかと私は考える。本来は転輪王経類や『前後経』にあった、転輪王が統べる未来の理想世界についての阿含経の常用文を使い回しているうちに、その常用文に含まれているモチーフが、他の経典にあるウッタラ・クル世界や天界の表現からの影響も加わって、増加してゆくのは自然な成り行きであったと思う。阿含経は忠実に暗唱されるべき聖典

であるから、はめを外したようにやたらに文を増やしてしまうわけにはゆかなかったが、恐らく聖典下の註釈のレベルではどんどん説明や描写が細かくなっていったはずであり、それがあつた時代になると聖典の表面に出てくる。弥勒下生經の段階になるとがぜんモチーフの増加に拍車がかかる。文献X・MSKがもつ独自の三つのモチーフのうち、(e)〈苦がなくなり、樂のみになる〉というモチーフは阿含段階から萌芽があつたともいえるが（転輪王經のモチーフ(vi)〈豊作富樂繁榮〉を参照）、残りの二つの強いモチーフ、つまり(d)〈大地による糞便の処理〉というモチーフと、(b)〈美貌やその他(身体的能力)の卓越〉というモチーフは、明らかに阿含の段階にはなかつたもので、その後の段階で生まれたものと思われる。

もし文献X・MSKの七つのモチーフの成立を、阿含經の段階と弥勒下生經の段階の中間に位置させるならば、次のように三段階になる。

第1段階：阿含・ニカーヤの段階：転輪王經類や『前後經』のモチーフ

第2段階：正量部文獻の七つのモチーフ

第3段階：弥勒經の段階：弥勒下生經類の多種多様なモチーフ

私がここで文献X・MSKのモチーフを、弥勒經の前の段階に位置させるわけは、文献Xは直接弥勒下生經を参照して、そこから七つのモチーフを取つたのではないと推測するからである。そう推測する理由は、MSKと文献Xが第10劫のみならずそれ以降の住劫が終わるまでの未来の歴史を説きながら、どこにも一切弥勒の名を出さないことである。もし弥勒下生經が直接のソースなら、せつかく未来の劫の理想世界の話を説いているのだから、弥勒の名を出してもよさそうなものである。弥勒の名を全く伏せたまま、こっそり弥勒下生經の一節を利用するというのは、仏教徒の態度として不可解である。むしろ、MSKと文献Xの「未来の人寿八万の世」描写ブロックは、弥勒下生經ではなく、正量部が独自にもつ、やや発達した形の阿含經典か論書をソースにしているのではないだろうか。MSKと文献Xのこれらの七つのモチーフは、転輪王經類から弥勒下生經類へと発達する途中の阿含經か阿毘達磨論あたりから取られたものではないか。もともと阿含・ニカーヤの転輪王經類に弥勒の名が出るのは後の時代の付加によるものであり、部派によっては転輪王經にあたる阿含聖典には弥勒の名が説かれていなかった（中阿含(70)転輪王經では未来の転輪王たる螺śāṅkhaの名が説かれるが(T1 524c1)弥勒の名は出てこない点、より古い形を伝えてい

る)。弥勒信仰を仏説と認めるかどうかは諸部派の判断にまかされ、それで MSK や文献 X は弥勒を全く説かずには無視しているのではないだろうか¹¹。弥勒下生経の或る系統の記述と、文献 X・MSK の「人寿八万の世」ブロックの記述がかなりよく合うという事実は、正量部がその下生経から直接借用したのではなく、むしろ下生経が作られる前段階の、その聖典素材が作られる段階において、七つのモチーフが西北インド・西インドあたりの仏教徒によって共有されていた時代があったからではないか（それが第 2 段階の時代にあたる）、と解釈することも出来よう。モチーフ(b)〈美貌やその他(身体的能力)の卓越〉とモチーフ(d)〈大地による糞便の処理〉が正量部の阿含だけがもつ独自の聖典伝承であったと考える必要は全くなく、ある程度部派を越えるかたちで共有されていた新しい聖典素材として、阿含後の時代に出てきた新しいモチーフ(b)・(d)が、部派としてはひどく後発であった正量部が自らの経と論を確立する時に、聖典内に採用されたと考えるべきではないだろうか¹²。第 3 段階において、その超部派的に共有された聖典素材を或る人が弥勒下生経の或る系統の作成に利用したため、正量部の「人寿八万の世」ブロックの記述とよく合う結果になったのではない。特に義浄訳の下生経などとよく合うのは、その下生経の系統が下敷きにした聖典素材の系統と、正量部が経・論で採用した聖典素材の系統が同じだったからではないだろうか。

注

- 岡野潔 (2008) : 「やがて世界が終わる、世界が生まれ変わる——『大いなる帰滅の物語』第 4 章 2 節～4 節読解——」, 『哲学年報』67 輯, 2008 年 3 月, 15-17 頁。
- 「転輪王経類」の中で、最も古い形を随所に示す増一阿含礼三宝品第 50 第 4 経 (T2 806c21-810b19) を例外とする。この経は人寿八万歳の世の閻浮堤の記述や人寿減少の最後にくる刀兵劫の宇宙論がまだ付加されていない段階の形を残している。
- 石上善応 (1989) : 「ネパール本 “Maitreyavyākaraṇa”」, 『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』, 平楽寺書店, 295-310 頁。
- ここで石上善応の梵文テキストを *maheśākhyā (能力に勝れた) と訂正し、また *mahānāgabalānvitāh (偉大な象力を具えた) と読む。
- 鶏鳴(鶏飛)のモチーフに関しては、岡野潔 (2008) : 前掲, の MSK 4. 4. 7 の和訳の注 46 を参照。
- R.E. EMMERICK (1968) : *The Book of Zambasta : a Khotanese Poem on Buddhism*, London, pp. 307-308. 古くは次の翻訳も有る : Ernst LEUMANN (1919) : *Maitreya-samiti, das Zukunftsideal der Buddhisten, Erster Teil, Strassburg, Teil I*, S. 81-84.
- 古トルコ語訳のマイトレーヤ・サミティ (Maitrisimit, Hami 写本) は、テキストの

- 第4章に人寿八万歳の世の描写の箇所があり、そこでは阿含経的な四つのモチーフが確認できる：G. SHIMIN & H.-J. KLIMKEIT (1988) : *Das Zusammentreffen mit Maitreya*, Wiesbaden, S. 221. 蔵訳聖弥勒菩薩発趣経については、渡辺照宏による次の和訳があるが、特に該当するモチーフ群は見出せない。渡辺 (1966) : 『愛と平和の象徴 弥勒経』, 筑摩書房, 162頁以下。トカラ語Aのマイトレーヤ・サミティ劇は、次の著作に報告されているが、該当するモチーフ群は見出せない：Ji XIANLIN, Werner WINTER, Georges-Jean PINAULT (1998) : *Fragments of the Tocharian A Maitreyasamiti-Nāṭaka of the Xinjiang Museum, China*, Berlin / New York (同書は『季羨林文集』第11巻, 河西教育出版社, にも収められた)。パーリ文アナーガタ・ヴァンサ (研究：Ernst LEUMANN (1919), Teil II, S. 177-226) も同様である。
- 8 福田琢 (2001) : 「加藤清遺稿蔵文和訳『世間施設』(4)」, 『同朋大学論叢』84号, 50頁。
 - 9 『前後経』つまり説本経については寺岡正博 (1986) の研究がある : 「弥勒下生思想の一断面——『説本経』を中心として——」, 『印度哲学仏教学』1号, 89-104頁。
 - 10 香川孝雄 (1962) : 「弥勒思想の展開」, 『佛教大学研究紀要』44・45号合併号, 224頁。
 - 11 ちなみに正量部の宇宙論文献, 立世論にも弥勒の記述が無い。劫末についての特別な信仰をもつ正量部は弥勒信仰を認めていなかった可能性も考えられる。正量部は弥勒仏の出世を認めるとしても, 全く必要としないのかもしれない。弥勒仏に救済者としての特別な価値を認めないのかもしれない。正量部が熱意をもって「劫末の思想」を発達させたのは, 信者を弥勒仏信仰に導くためであったとは思えない。正量部の切迫した異常な終末観の背後には, 弥勒信仰でもなく阿弥陀信仰でもない, 別の救済信仰が用意されていたのかもしれない。ここには正量部の特別な終末論を考える鍵が隠されている気がする。有部は転輪王経→説本経→下生経という道筋で弥勒信仰に進んでいったが, 正量部は同じ転輪王経の宇宙論から出発して, 有部が辿った道筋とは異なる道を辿った可能性がある。
 - 12 義浄訳の下生経の原本の成立を5~6世紀とすれば, それと何らかの関係がある文献Xは, その成立年代を5~6世紀以降, 10世紀までの間に置けるのではないかと思う。

※本研究は科研費 (19520052) の助成を受けたものである。

On the Relationship between Maitreyavyākaraṇas and the Mahāsaṃvartanīkathā

Kiyoshi Okano

[Abbr. :] MSK = Mahāsaṃvartanīkathā ; Śāstra X = a very long quotation from a unknown Śāstra(no title) of the Sāṃmitīyas in the chapter 8 of the Saṃskṛtāsaṃskṛtavinīścaya ; Maitr = Maitreyavyākaraṇa

In the MSK 4. 4. 5–12 and the Śāstra X §§ 175–181 we find the following 7 motifs for description of the future ideal life of Jambudvīpa :

Motif a : Daughters of five hundred years old will be married (§ 175=MSK 4. 4. 5). **Motif b** : All men will have good looks, physical strength, etc (§ 176=MSK 4. 4. 6). **Motif c** : Villages and towns in Jambudvīpa will be kukkuṭa-sampātika (§ 177=MSK 4. 4. 7). **Motif d** : For every defecation the earth will split and afterward close (§ 178=MSK 4. 4. 8). **Motif e** : People will live in extreme comfort without sufferings (§ 179=MSK 4. 4. 9–10). **Motif f** : There will be only slight illnesses (inconveniences) (§ 180=MSK 4. 4. 11). **Motif g** : At that time the average life span will be 80000 years (§ 181=MSK 4. 4. 12).

This ‘motif-block’, a collection of 7 motifs in the MSK and the Śāstra X must go back to a unknown old source in the Sāṃmitīya Āgamas or apocrypha. For inquiry into those 7 motifs I try to find the same motifs in the extant buddhist literature. The following is my result of search for the 7 motifs :

[1.] In the Chin. *Maitr (T No. 455, T14 426b1–6) 6 motifs correspond : **a, b, d, e, f, g** (only **c** missing). [2.] In the Chapter 22 (Maitr) of “the Book of Zambasta” 6 motifs correspond : **a, b, c, d, f, g** (only **e** missing) . [3.] In the *Maitr (No. 454, T14 423c17–424a6) 7 motifs : **a, b, c, d, e, f, g**. [4.] In the *Maitr (No. 456, T14 429a23–b23) 7 motifs : **a, b, c, d, e, f, g**. [5.] In the *Maitr (No. 457, T14 434b28–c2) 4 motifs : **a, c, f, g**. [6.] In the *Maitr (No. 453, T14 421a29–c13) 5 motifs : **a, c, d, f, g**. [7.] The Chin. Lokaprajñāpty-abhidharmaśāstra (No. 1644, T32 221a7–15) 5 motifs : **a, c, e, f, g**. [8.] In the Cakkavattī-sihanādasutta (DN26), the Chin. *Cakravartirājasūtra in DA (No. 1, T1 41c), the Chin. *Dṛḍhanemisūtra in MA (No. 26, 524b), the Chin. *Pūrvāntāparāntasūtra in MA (No. 26, 509c), the another *Pūrvāntāparāntasūtra (No. 44, T1 830a), the Chin. Lokaprajñāpti (No. 1, T1 120c–121 a) and the Tibetan Lokaprajñāpti correspond 4 or 5 motifs : **a, c, e(?) , f, g**.

I guess that the unknown source of the 7 motifs in the MSK and Śāstra X was not remote from a source of Maitreyavyākaraṇas (eps. a source of [1.] or [3.]), because the motif **b** and **d** appeared in the time of formations of Maitreyavyākaraṇas.